

23 日本画家：高島北海

高島北海（本名は得三）（1850-1931）は、山口県の萩に生まれました。父親は医師で、植物学や鉱物学を基礎とした医療を行っていたことから、高島は幼いときから地質学と植物学に興味を持ちました。



高島北海/TAKASHIMA Hokkai
© Aklakoi

高島は明治政府の工部省に入省し、明治5（1872）年から4年間、兵庫県にある生野銀山の鉱山学校に赴任しました。そこで、お雇い外国人として同校の技師長を務めていたジャン＝フランソワ・コワニエ（Jean-François COIGNET）（1837-1902）から、フランス語と地質学や植物学を学びました。明治17（1884）年に政府から派遣されて、万国森林博覧会に参加するためにイギリスへ渡りました。ヨーロッパ各地の森林を視察した後、ナンシー水利林業学校（現在のフランス国立農村工学・河川・森林学校 École Nationale des Eaux et Forêts : ENEF）に3年間在学して、植物学を学びました。

ナンシーは、フランスにおけるアールヌーボー様式の中心地でした。そして、高島がナンシーに滞在した19世紀末は、花や植物のモチーフを多用したアールヌーボー様式が最も花開いた時代でした。ここで、高島はナンシー派を代表するエミール・ガレと出会いました。ある研究によると、当時は至る所で日本の影響が色濃く見られており、ジャポニスムにうんざりしていたガレは、決して日本の影響は受けないと心に誓ったと言います。しかし、高島の自由な想像力と正確な植物描写は、ガレを始めとするナンシー派の芸術家に大きな影響を与えました。ガレは、高島から日本の植物を始めとした日本に関する知識を得たと言われていいます。高島との交流がきっかけとなって、ガレは水墨画のようなぼかし表現を伴う黒褐色のガラスを生み出しました。

高島は、帰国後は明治政府の技官として森林行政に携わりながら、植物学に対する深い造詣を活かし、高い写生技術を用いた山岳風景画を描きました。そして、47歳で退官し、52歳から雅号を「北海」として本格的に中央画壇で活躍しました。

ナンシーがアールヌーボー様式の中心地であり、そのナンシーでアールヌーボーが流行した時代に高島とガレが出会い、高島が植物学者でもあり芸術家でもあったからこそガレの作風に影響を与えました。このようないくつもの偶然の重なりが、新たな美術様式の発展を後押ししました。

掲載日：2023年2月1日